

野菜栽培に関する用語集

2025/2/15

(野菜の栽培・ガーデニング等で用いられる用語集です。)

用語50音	項番	用語	意味
あ行	1	IPM (アイピーエム：総合的有害生物管理)	総合的病害虫・雑草管理 (IntegratedPestManagement) の略称で、利用可能なすべての防除技術 (耕種的防除, 物理的防除, 生物的防除, 化学的防除) の経済性を考慮しつつ、総合的に講じることで、病害虫・雑草の発生を抑える技術です
	2	赤玉土 (あかだまつち)	積み重なった火山層を乾燥させた関東ローム層の土のこと。 赤味かったの土色が特長。 粒によって種類はありますが、通気性(水はけ)・保水性(水もち)・保肥性(肥料もち)がよいのも赤玉土の良点でもあります。赤玉土自体、肥料成分が含まれないため多数の植物と相性が良い。
	3	畦 (あぜ)	畝 (うね) と畝の間の事。主に人が通る道の事を指します。 畦の幅をあまり狭くすると、芽かき等の作業がしにくくなるので要注意！！
	4	粗起こし (あらおこし)	耕作の準備作業として畑をおおざっぱに掘り起こすこと。
	5	アレロパシー (Allelopathy)	植物が自ら分泌する化学物質を利用してほかの植物や虫への抑制・忌避・殺虫・殺菌などの作用をもたらす効果のことで、農業での活用が進んでいます。「持続可能な農業」への有効な手段として注目されるアレロパシーの現状を解説します。 トマトには他の植物を排除する化学物質を放出する特性 (アレロパシー) があるため、トマトを栽培した後の畑は、自ずと雑草が少ない環境になります。アブラナ科の野菜を育てる上で警戒が必要なネキリムシは雑草に産卵するため、前作でトマトを栽培するだけでこれらの野菜を育てるための準備が整うというわけです。 また、セイタカアワダチソウ・ヨモギなどは「ポリアセチレン」という化学物質を分泌し、ほかの植物を寄せ付けず繁茂する雑草です。また、蕎麦は昔から雑草との競合に強いことが知られ、手入れのできない遊休農地の活用に利用されてきました、そばの生長が早くほかの雑草よりも先に葉を広げ日光を遮ることや、養分を吸収する力が強いことが理由とされてきました。アレロパシーを農業に活用する事例が増えつつあります。例えばトマトとハーブの一種であるバジルを一緒に植えることで、お互いの生長が促進されることはよく知られています。一方で、連作障害にアレロパシーの作用が関係していたことが明らかになった事例もあります。
	6	あんどん仕立て	鉢に数本の支柱をたて、まわりを紐や輪で囲った中で、植物を絡ませて育てるつくり方。

野菜栽培に関する用語集

2025/2/15

用語50音	項番	用語	意味
	7	EC (電気伝導度)	土壌中にある物質のイオン濃度の総量。 チッ素などの肥料成分はイオン化された状態で植物に吸収されるため、ECは土壌中の養分（肥料分）の多さを表す。
	8	移植ゴテ(いしょくごて)	片手で持つ小型のスcoopのこと。苗植え付け時の穴掘りや土すくいなどに使用する。
	9	一番花（いちばんか）	株の中でいちばん最初に咲いた花。
	10	一年草（いちねんそう）	種を蒔いたその年のうちに発芽し、花が咲き、種をつけ、枯れる植物のことで「一年性植物」とも呼ばれる。 きゅうり・スイカ・かぼちゃ・トマト・ナス・ピーマン・枝豆等の豆類
	11	ウイルスフリー苗	ウイルスに感染しにくい植物の芽の先端部分を培養させて作った、ウイルスに感染していない苗。 作物本来の能力を発揮し、高品質・多収穫に繋がる
	12	畝（うね）	水はけをよくしたり畑の通路確保のために一定間隔をあけて土を盛り上げた列の事。 畝づくりのメリットは、根腐れ防止効果。
	13	畝高（うねだか）	地表面から畝のてっぺん高さまでの距離のこと。
	14	畝幅（うねはば）	床と床の間の幅のこと。畝（うね）に作つけした種（苗）と、隣の畝（うね）に作付けした種（苗）までの距離。
	15	畝間（うねま）	畝（うね）に作つけした種（苗）と、隣の畝（うね）に作付けした種（苗）までの距離をさします。
	16	永年性作物 (えいねんせいさくもつ)	一度植えておくと、長い間収穫できる作物。
	17	液肥（えきひ）	液体肥料のこと。即効性があるため、追肥に利用する。 土が乾燥している場合は、一旦灌水（かんすい）し、半日程度たってから施用する。 花やつぼみにはかからないように注意する。
	18	栄養成長 (えいようせいちょう)	自らの体を作る個体維持のための成長（葉茎や根の成長）（⇔ 生殖成長）
	19	栄養繁殖 (えいようはんしょく)	種子によらず個体数を増やすこと。 栄養繁殖の野菜、イチゴ、サツマイモ、サトイモ、ジャガイモ、ショウガ、ニンニク、ヤマイモ、ラッキョウ、など
	20	エディブルフラワー	エディブル「edible」＝食べられる、フラワー「flower」＝お花のこと。 近年サラダなどの彩などで人気がある。

野菜栽培に関する用語集

2025/2/15

用語50音	項番	用語	意味
	21	F1交配 (えふわんこうはい)	固定した形質をもった2品種を交配した雑種第1代目の品種のこと。 雑種強勢の遺伝法則から新品種に比べて生育がよく、形質も優れている。
	22	F1種子	野菜の種には「F1種（交配種）」と「固定種」があり、現在扱われている種のほとんどは「F1種」です。 F1種とは、味、収量、耐病性などを高めるため、人工的にかけ合わせた交配種（種袋に〇〇交配などと記されています）のこと。一代雑種ともいわれ、その品種の特性は1代限りにおいてしか発揮されません、種を採ってまいても同じ形質の野菜になりません。なお、遺伝子組換え種子とは別物です。 これに対し固定種は、育てた野菜から種を採り、その種から野菜を育てるといった自家採種を繰り返して形質が安定した野菜のこと。京野菜、加賀野菜といった伝統野菜、各地方で守られてきた在来種など、固定種の種はたくさんあります。 固定種は、F1と比べ生育が揃わない（一斉収穫に向かない）のですが、小規模で趣味で楽しむ家庭菜園ではそれが逆にメリットと考えることもできます。また自家採種を楽しむことができるのも、固定種ならではの点です。
	23	晩生（おくて・ばんせい）	作物や果物で、おそく成熟する品種（⇔ 早生） 同じ野菜でも、品種によって種まきから収穫までの期間（栽培日数）が違います。 早い時期から植えられて短期間で収穫できる「早生」、早植えには向かずゆっくり育つのが「晩生」。早生は栽培期間が短いため、病虫害の被害に遭いにくく栽培管理も楽なので、初心者にもオススメです。 晩生は栽培期間が長い分、味のよいものができますが、病虫害に掛かるリスクが増え、管理や手間も掛かります。 また、初夏にエダマメを食べたければ早生系を4月にまく、完熟させたダイズとして収穫するなら晩生系を6月にまく、タマネギを長期保存したい場合は晩生系を選ぶ、といったように使い分けたりします。
	24	親づる・小づる	つる性の植物ではじめての発芽から伸びて主計となるのが「親づる」。 親づると葉の間から出たわき芽が伸びたものが「小づる」。
	25	お礼肥（おれいごえ）	開花後や、果実を収穫した後の植物を消耗した樹勢（じゅせい）を回復させるために与える肥料のこと。 株を充実させる役割などがあり、球根植物の場合は球根を肥大させる意味もある。

野菜栽培に関する用語集

2025/2/15

用語50音	項番	用語	意味
か行	1	塊茎（かいけい）	地下茎（地中の茎）の先が養分を蓄えて、塊状に肥大したもの。ジャガイモ、サトイモなど。
	2	塊根（かいこん）	根が塊状に肥大して、養分を蓄えているもの。サツマイモなど。
	3	開墾（かいこん）	山や野を切り開いて田畑をできる状態にすること。 開墾鋤もしくはトンビ鋤があります、トンビ鋤と呼ばれ主に新地の開墾・春の土起こし・収穫後の整地に使われる鋤です。強靱な刃が硬い土に突き刺さり菜園の最初にはおすすめの様です。
	4	隔年結果 （かくねんけっか）	果樹で、よく実がつく表年（なり年）と実がつかない裏年が1年おきに交互に現れること。実を多くつけた枝には、翌年に花芽が作られにくいという性質から起こる現象。 柑橘、リンゴ、柿、栗で多く発生する。
	5	果菜類（かさいるい）	果実（かじつ）を食用とする野菜のこと。 なす・トマト・オクラ等
	6	化成肥料 （かせいひりょう）	無機質の肥料原料を科学的に加工して作られているもの。 化学的に合成されている分、野菜に合った肥料成分のみが配合されているため、用途に合った肥料を選ぶことができる。
	7	株間（かぶま）	畝に植えた苗と苗の間隔のこと。
	8	株分け（かぶわけ）	大きく成長した株をいくつかに分けること。 過密になった株を若返らせたり、株を増やすために行う。
	9	花房（かぼう）	トマトやイチゴなどで、房状に咲く花の集まり。
	10	花蕾（からい）	花のつぼみのこと。ブロッコリーやカリフラワーはこれを収穫する。

用語50音	項番	用語	意味
	11	感光性（かんこうせい）	一定期間連続する1日の長さによって、植物が栄養成長から生殖成長へ転換する性質のこと。 丹波名物黒豆などは感光性と呼ばれるもので、日照時間によって生育ステージを踏むので早く種を蒔こうが、温度を調節しようが、枝豆として完熟する時期、美味しい時期は10月半ばを過ぎてきます。雨の降らない年は水を適期にやらなければいけませんし、気候が暑すぎるとさやの生りは少なくなってしまう。 よく野菜でも晩生品種と早生品種というのが、ありますがこれは感光性と感温性の違いだと言われています。 要するに、早生は温度を感知して成長し、晩生は太陽光の当たる時間によって生育ステージを踏んでいるようです。 全てがこの定理に当てはまるかどうかは言い切れませんが、だいたいがそのようです。 例えば感温性のキャベツに関して言えば、春波という早生品種ですが、2月の時点でビニールをかけたところと、何もしなかったところでは現在の時点で全然大きさも結球度合いも変わってしまいます。これは、ビニールによって温度を確保してやったキャベツはどんどん生育し、何もしなかったところはいつまでも続く寒気で上手く生育できなかったと考えられます。 結果的には、早く生育したキャベツと遅れて出来てくるキャベツとで、出荷期間を長くすることが出来そうですが・・・。 作物の性質を把握して、その年、その年の気候の変化に合わせて対応し、その年の最高のものを育てようとするのが、野菜栽培の精神なのだと思います。
	12	寒締め（かんじめ）	野菜を冷たい空気にさらすこと。 寒さに耐えるために自ら葉の水分を減らし、糖を増加させるため甘みが増します。葉は厚く、姿は開張型になります。寒締め野菜には、ダイコンやハクサイ、ニンジン、ネギ、コマツナ、タアサイ、ハウレンソウなど意外と多くの種類の野菜が多くあり、一部の地域では、寒さで甘くなることから、「寒」と「甘」をとり“カンカン野菜”などと呼ばれています。
	13	緩効性肥料 （かんこうせいひりょう）	施してから穏やかに効果を現し、長期にわたり肥効が持続する肥料。
	14	間作（かんさく）	畝の間や株と株の間に、他の作物を栽培すること。
	15	休眠（きゅうみん）	種、球根、苗などが、生育に適さない時期を越すために、活動を一時的に休むこと。
	16	切り戻し（きりもどし）	茎や枝を短く切り詰めること。

野菜栽培に関する用語集

2025/2/15

用語50音	項番	用語	意味
	17	苦土石灰（くどせっかい）	酸性土壌からアルカリ性土壌に変える土壌改良剤のこと。 酸性に傾いた土壌を中和させるときに使用します。 炭酸カルシウムと炭酸マグネシウムが主な主成分となっており、カルシウムやマグネシウムの補給も可能です。 （根を強くしたり、葉の変色を防ぐ効果もあります。） ※注意※ 苦土石灰を土に散布してから約2週間後に肥料を混ぜるようにしましょう。 肥料と同時に混ぜると化学反応でアンモニア臭を発生させることがあります。
	18	クラウン	茎と根の境界部のこと。茎の基部とそこから発生している根の基部をひとまとめにしてクラウンと呼ぶ。 イチゴでは、株元の部分を指すこともある。
	19	鍬（くわ）	土づくりのときに使用する道具。 耕したり、畝を作ったりするときに使用する。主に開墾用の鍬と耕作（うね立て）用の鍬に分かれる。
	20	結球（けっきゅう）	植物の葉が重なり合い玉のようになること。 白菜、キャベツなど葉菜類に多い。
	21	好光性種子／嫌光性種子 （こうこうせいしゅし／けんこうせいしゅし）	「好光性種子（又は光発芽種子）」は、種が発芽するときに光があった方が発芽が促進される種。そのため、種まきの際の覆土は薄くする。 反対に光に当たると発芽が抑制される種を「嫌光性種子（又は暗発芽種子）」と呼ぶ。 好光性種子 イチゴ インゲン ゴボウ コマツナ シソ シュンギク セロリ ニンジン パクチー レタス 嫌光性種子 カボチャ キュウリ スイカ ダイコン ダイズ タマネギ トマト ナス ニラ ネギ ピーマン マクワウリ
	22	耕作放棄地 （こうさくほうきち）	現に耕作されておらず、耕作の放置によって荒れ果て、通常の農作業では作物の栽培が客観的に不可能となっている農地のこと。
	23	荒廃農地 （こうはいのうち）	現に耕作されておらず、耕作の放置によって荒れ果て、通常の農作業では作物の栽培が客観的に不可能となっている農地のこと。
	24	耕盤層（こうばんそう）	作土層の下にあるトラクターなどで耕しているうちに押し固められてしまった部分。

野菜栽培に関する用語集

2025/2/15

用語50音	項番	用語	意味
	25	根菜類（こんさいるい）	地下にできた茎や根を食用とする野菜のこと。 大根・にんじん・じゃがいも・さつまいも等
	26	混作（こんさく）	同じ耕地に2種以上の作物を同時に栽培すること。
	27	コンパニオンプランツ	育てたい野菜や花のそばに植えることでよい影響をもたらす植物のこと。 コンパニオンプランツを植えることで、病気や害虫の被害にあいづらくなる、生育がよくなる、風味や味がよくなるといった作用がある。

野菜栽培に関する用語集

2025/2/15

用語50音	項番	用語	意味
さ行	1	催芽（さいが）	発芽を良くするために、種をまく前に水分や温度を最適にする、種子を傷つけるなどの処理をすること。
	2	在来種（ざいらいしゅ）	昔からその土地で作られてきた固定種の野菜。
	3	作土層（さくどそう）	作土層とは普段から鍬や耕運機で耕している畑の土の上層部。やわらかい部分の土のこと。
	4	挿し木（さしき）	野菜からとったわき芽や茎などを直接土にさして育てる方法。 野菜でいうとトマトで行うことが可能。
	5	CEC（塩基置換容量（えんきちかんようりょう））	塩基置換容量（Cation Exchange Capacity）とは、土が肥料を吸着できる能力（保肥力）のこと。 土壌はマイナスイオン、肥料の成分（NH4+、Ca2+、Mg2+など）はプラスイオンに覆われているので、土壌は成分を吸着して肥料を保持し、いつでも根に肥料を与える事ができます。 肥料を細かく見ていくと、イオンレベルまで達します。 肥料には、陽イオンの肥料や、陰イオンの肥料があります。 肥料の中でアンモニアなどは、陽イオン、肥料の中で硝酸などは、陰イオンです。 CECは、アンモニアなどの陽イオンを保持する能力の指標です。
	6	C/N比	C/N比（炭素率）とは、有機物などに含まれている炭素(C)量と窒素(N)量の比率。 ある有機物に炭素100g、窒素10gが含まれている場合、この有機物のC/N比は10となる。 C/N比が小さいほど窒素を多く含んでおり、肥効の即効性が高い。 C/N比の参考 バーク（樹皮）： 100～1300 、イネわら： 60 、米ぬか： 23 、牛糞： 16 、鶏糞： 7
	7	直まき（じかまき）	種を畝やプランターに直接まく方法。 苗の込み具合を見て間引きしながら育てる。 移植を嫌う植物に用いられる。
	8	自家受粉（じかじふん）	同じ花や同じ株の雄しべ、雌しべによって受粉すること。
	9	支柱（しちゅう）	野菜などが倒れないようにしたり、誘引したりするのに使用する棒のこと。
	10	雌雄異花・雌雄同花 （しゅういか・しゅうどうか）	一つの花に雄しべまたは雌しべどちらかしかない花を「雌雄異花」。 一つの花に雄しべと雌しべの両方を持つ花を「雌雄同花」。 雌雄同花の野菜には、ナス科やマメ科があります。 雌雄異花の野菜には、ウリ科やイネ科があります。

野菜栽培に関する用語集

2025/2/15

用語50音	項番	用語	意味
	11	周年栽培 (しゅうえんさいばい)	作型を組み合わせることで、作物のある一つの品目を一年中栽培すること。
		宿根草 (しゅっこんそう)	多年草の一種で、何年も生育と開花を繰り返す植物のこと。 根だけが残ри生育期が終わると地上部が枯れてしまうものが翌年また生育する。 (例) アスパラガスやフキ、ウド等
	12	受粉・授粉 (じゅふん)	「受粉」＝「花粉を受ける」。めしべに花粉が付着した”状態”を指す。 「授粉」＝「花粉を授ける」。昆虫や人工的にめしべを付着させる”行為”を指す。
	13	春化 (しゅんか・バーナリゼーション)	植物が冬の低温状況に一定期間さらされることで、花芽分化して開花が促進されること。
	14	消石灰 (しょうせっかい)	水酸化カルシウムです。水を加えても反応はしません。生石灰が水と反応すると消石灰になります。 学校のグラウンドでのライン引きなどによく使われているものです。
	15	条・条間 (じょう・じょうかん)	作物を植えつけた列を条 (じょう) と呼び、条と条の間隔を条間と呼びます。
	16	筋蒔き (すじまき)	筋蒔きというのは、指や道具で溝を作って筋状に蒔いていく方法になります。 1列に蒔く場合は、1条蒔き、2列に蒔く場合は、2条蒔きなどと呼びます、カブやニンジンなどの葉菜類に多く適した蒔き方となっております。 発芽した後の間引きもしやすく、追肥や、土寄せ、除草作業が、簡単になるというメリットがあります。
	17	整枝 (せいし)	枝や葉などを整理 (間引いていく) すること。 それにより風通しをよくしたり、株の根元の加湿を防ぎ病気から苗を守る効果があります。 また、つる性植物 (きゅうりなど) の果実がつきやすい枝の成長を促したり、新しい枝葉の成長も促します。摘芯・摘果・適葉・摘花・わき芽かきなども同様です。
	18	生石灰 (せいせっかい)	酸化カルシウムの俗称のこと。水を加えるとシューシューッと水蒸気をあげて激しく反応し熱を発生します。工業用で使用され、園芸用で使用されることはありません。
	19	生殖成長 (せいしよくせいちょう)	子孫を残す種族維持のための成長 (花芽形成・開花・結実) (⇔ 栄養成長)

野菜栽培に関する用語集

2025/2/15

用語50音	項番	用語	意味
	20	施肥（せひ）	作物の生育をよくするため土壌に肥料を施すこと。 施肥の方法には元肥と追肥がある。
	21	先祖返り （せんぞがえり）	親に現れなかった先祖の遺伝上の性質が、突如として子に現れること。

野菜栽培に関する用語集

2025/2/15

用語50音	項番	用語	意味
た行	1	太陽熱処理 (たいようねつしょり)	太陽熱で地温を上げて、土壌中の病原菌や害虫、雑草などを防除する方法。 雑草対策に太陽熱マルチ殺草処理（太陽熱土壌消毒）を試してみましょう。
	2	単為結果（たんいけっか）	受精しなくても果実ができること。この場合、種はできない。 自然界ではバナナやパイナップルなどで起こり、また、種なしブドウは人工的に誘発したもの。
	3	団粒・団粒構造 (だんりゅう・たんりゅうこうぞう)	土壌の粒子が有機物や陽イオン等のはたらきによって結合し、小粒の集合体となったもの。この状態を団粒構造といいます。これに対して土壌に粒子がバラバラになった状態の事を単粒構造といいます。 土壌が団粒構造になることにより保水性や透水性を兼ね備えた良好な土壌になります。そのため土壌の生産力は高くなり、植物の生育は良好になります。よくフカフカの土と言いますが、これは土壌が団粒構造になっているという事ですね。【団粒構造 5つのメリット】 1) 通気性の向上 団粒どうしの隙間を新鮮な空気が通過する事で根の酸素吸収が促進されます。 2) 排水性の向上 団粒構造は排水性に優れているため根腐れのリスクを回避できます。 3) 保水性と保肥性の向上 団粒内部に適度に水分を蓄えることで乾燥を防ぎます。土壌の水分蒸発や水分切れが起こりにくくなります。そのため土の水持ちが良く、水に溶けた肥料成分を蓄えることができます。 4) 土壌生物の発育を促進 土が適度のサイズで固まるため、土全体の表面積が広がります。そのため微生物が発達しやすくなり病原菌・細菌が蔓延しにくくなると言われています。水分・ミネラル・肥料成分が蓄えられている団粒構造の土壌には、隙間が多いため根が張りやすく養分を吸いこみやすくなります。 5) 病害虫が発生しにくい 団粒構造の土壌には微生物が住みやいため、土壌中には多様な微生物が存在しています。生態系のバランスが取れていて生物性が高いため、病害菌が異常繁殖する可能性が低く、連作障害も起こりにくいと言われています。
	4	堆肥（たいひ）	家畜のふんや落ち葉、木の皮等の有機物を、微生物の力で分解・発酵させて作る土壌改良のため用土のこと。
	5	多年草（たねんそう）	数年にわたって枯れず、毎年花を咲かせる植物のこと。 宿根草も多年草に含まれる。 多年草でも、日本の冬をこせなかったり、1年で収穫を終わらせる作物も多い。 アスパラガス・ニラ・ゴボウ・じゃがいも・サツマイモ
	6	単肥（たんび）	肥料の3要素「窒素」「リン酸」「カリウム」のどれか一つだけしか含まれていない肥料のこと。

用語50音	項番	用語	意味
	7	窒素飢餓 (ちっそきが)	作物の生育障害の一つ。 植物の生育に必要な窒素が少ない状況で、有機物を与えすぎることにより生じる。(微生物が大量の窒素を消費してしまい、植物の生育に必要な窒素が不足する。) C/N比が高い程、窒素飢餓が発生しやすい。
	8	中耕 (ちゅうこう)	作物の生育中に株の周りの土や畝の間の土を浅く軽く耕すこと。 水はけを良くすることが目的。鍬レーキが活躍します。
	9	頂芽 (ちょうが)	茎の先端にある芽のこと。 下方にある芽はわき芽(側枝)と呼ぶ。頂芽を取ると(摘芯)わき芽が伸長する。
	10	長日植物・短日植物 (ちょうじつしょくぶつ・ たんじつしょくぶつ)	長日植物(ちょうじつしょくぶつ)とは、ある限界の時間よりも日長が長くなると花芽形成や開花が促進される植物。 短日植物(たんじつしょくぶつ)とは、ある限界の時間よりも日長が短くなると花芽形成や開花が促進される植物。
	11	追肥 (ついひ)	植物の生育の過程に合わせて必要な栄養を補うために追加で施す肥料のこと。 すぐに効果が現れる化成肥料や液体肥料を利用することが多い。
	12	接木苗 (つぎきなえ)	地下部の根の台木と地上部の茎葉の穂木を接ぎ合わせした苗。 台木に土壤病害に抵抗性を持った植物や、生育旺盛な植物や品種を使うことで、それらの長所を兼ね合わせる。 接木苗は一般的な苗と比較すると値段は高くなりますが、台木となる植物の特性により、低温伸長性や草勢が高まったり、耐病性や収量向上といったメリットがあります。特に、家庭菜園など省スペースで連作せざるを得ない場合は、連作障害による土壤病害を予防する「接木苗」がオススメです。接木苗を利用する場合は、台木から出る芽は早めに摘み取るようにしましょう。 台木は丈夫なものを使うので元気が良く、放置しておくと穂木が負けてしまいます。
	13	土寄せ (つちよせ)	作物の根元に土を寄せかけること。 根をしっかり張らすためや、ぐらつく株元に土を寄せることで倒伏を予防したり防寒したりする意味もある。

野菜栽培に関する用語集

2025/2/15

用語50音	項番	用語	意味
	14	つるぼけ	葉茎が必要以上に繁茂して、収穫対象である根や果実がよくできない現象。 サツマイモ、キュウリ、スイカなどのつる性作物によくみられることから、こう呼ばれる。 つるぼけの主な原因として、窒素過多（窒素肥料が多すぎる）がある。 植物には、自分の体を大きくする「栄養成長」と、子孫（種）を残す「生殖成長」の、2つの生育段階があります。順調に生育すればある段階で栄養成長から生殖成長に切り替わります。（花芽分化・とう立ち） しかし、栄養も日光もふんだんにある環境だと、“まだ大きくなれるから実を付ける（種を残す）のは後回しにしよう”と判断して、生殖成長に切り替えず、栄養成長をひたすら続けてしまいます
	15	摘芯（てきしん	作物の生長点を摘む(切る)こと。わき芽（側枝）の成長を促します。 ピンチや芯止めということもある。 摘芯を行う事で、わき芽を増やし収穫量を増やす効果とつるもの野菜の縦への成長を抑制する効果がある。
	16	摘蕾・摘花・摘果 （てきらい・てきか）	よい果実を得るために、適当な数の蕾（つぼみ）・花・果実を残して他を摘み取ること。 株の消耗を防いだり、果実の肥大促進をはかります。
	17	天地返し（てんちかえし）	冬季に表面の土と下の土を入れ替える作業のこと。 病害虫の退治や雑草に根切りや霜がおりて土をやわらかくのために行う。ミニショベルや刃付きショベルがおすすめです。
	18	展着材（てんちゃくざい）	農薬を散布するときに、薬剤が水に溶けて植物や病害虫に付着し、効力を持続するように混ぜる補助的薬剤。
	19	点まき（てんまき）	一定の間隔でまき穴を作り、数粒ずつ種をまく方法。トウモロコシなど大きくなる野菜に適したまき方。
	20	とう立ち（とうだち）	「とう」とは花を咲かせる茎のことで、「とう」が伸びることをとう立ちという。 とうが伸びて花が咲くと種子に栄養がいきってしまい刃が硬くなったりする。
	21	糖度（とうど）	野菜や果物などに含まれる糖の量。
	22	土壌酸度（どじょうさんど）	土が酸性かアルカリ性かということをpHという単位で表すこと。 pH7.0以下が酸性でそれ以上がアルカリ性です。作物に合わせて調整します。【土壌酸度計】で計測できます。
	23	徒長（とちょう）	作物の枝や茎が間延びして伸びること。日照不足によってなりやすい。 小苗の段階での窒素の与えすぎも徒長の原因となる。 徒長になると苗が貧弱になり枯れやすく実りも少なくなります。

野菜栽培に関する用語集

2025/2/15

用語50音	項番	用語	意味
	24	トンネル栽培 (とんねるさいばい)	畝をビニールなどでトンネル状に覆い作物を栽培する方法のこと。
な行	1	軟白栽培 (なんぱくさいばい)	野菜の茎葉を白く育てるために人為的に光を遮って成長させる栽培法です。 軟白栽培では、土を寄せたり、紙を巻きつけたりして日光を遮断することで、茎葉の緑色化を防ぎ白色に仕上げます。アスパラガスやウド、ミツバ、ネギ、セロリなどに適用されます。
	2	二年草・越年草 (にねんそう・えつねんそう)	秋や冬から栽培し、翌年の春や夏に収穫を行う野菜を便宜上2年草もしくは越年草と呼ぶことがあるが、栽培期間をみてもわかるとおり2年も寿命がない。よって、この場合は厳密には1年草であるといえる。ほとんど2年草という呼称で呼ばれることが少なく、単に『秋蒔き植物』と呼ばれることのほうが多い。というかそれが普通。 一般的に用いられる2年草とは、『2年目に本格的に花を咲かせ、子孫を残し、枯れる植物』である。この場合、寿命は一年以上であり、多年草とも呼べる。ただ、栽培計画上紛らわしいので2年草と呼ぶことが多い。
	3	根鉢 (ねばち)	鉢植えの植物がしっかり根を張ったことにより、土と根が固まりとなったもの。
は行	1	バイオスティミュラント	植物に対する非生物的ストレスを制御することにより、気候や土壌のコンディションに起因する植物のダメージを軽減し、健全な植物を提供する技術。 農水省が発表した「みどりの食料システム戦略」に「化学農薬の使用低減に向けた技術」として記載されたことで、さらに注目が集まっている。
	2	培養土 (ばいようど)	植物の栽培用に複数種類の土や肥料を混ぜ合わせたもの。
	3	発芽率 (はつがりつ)	種袋メーカーが販売している種子のうち、何パーセントが正常に発芽するかを示す数値のこと
	4	花芽分化 (はなめぶんか／かがぶんか)	新芽が温度、日長などにより、花や実になることです。 チューリップやスイセンは低温に当たることで花芽分化するから、しっかり寒さに当てよう。 キンギョソウは花芽分化期の極端な高温や低温で、奇形花が発生する場合がありますので注意が必要です。
	5	バンカープランツ	病害虫の防除を目的として、害虫の天敵を集めるために育てる植物。
	6	パーライト	火山岩の真珠岩などを高温・高圧で焼成した、白色多孔質の人工軽石です。無菌で通気性と排水性に優れた用土で、土壌改良材として使用するほか、挿し木用土としても利用します。
	7	ピートモス	水苔類が長年堆積し、分解してできた有機物の土壌。保水性に富む。
	8	肥料やけ (ひりょうやけ)	肥料を多く施しすぎたり、土壌が乾燥して肥料濃度が濃くなり、根が傷んでしまうこと。

野菜栽培に関する用語集

2025/2/15

用語50音	項番	用語	意味
	9	覆土（ふくど）	種をまいた後、その上に土をかぶせること。 雨や水やりなどで種が流れてしまうのを防ぐためや、明るいところより薄暗い環境のほうが発芽に適している種が多い為。
	10	腐食（ふしょく）	土壌中で動植物の遺体が土壌微生物に分解・再合成された暗色無定形（コロイド状）の高分子化合物。 腐食は、無機養分を保持し、土壌の団粒化に役立つなど、作物の生育に重要な役割を果たしている。
	11	不織布（ふしょくふ）	繊維を織らずにかみ合わせたシートのこと。ベタ掛けに用いる。
	12	腐葉土（ふようど）	広葉樹の落刃が堆蓄し、半ば腐ったもの。 土の通気性をよくするために、園芸用土全般に混ぜて使用する。
	13	BLOF理論 （ぶろふりろん）	BLOF = Biological Farming（バイオロジカルファーミング）の略で、作物の植物生理に沿って、科学的・論理的に有機栽培を行う理論。
	14	分けつ・分けつ （ぶんげつ・ぶんけつ）	イネ科植物やネギなど、根に近い茎の節から枝分かれして株が増えること。
	15	pH（ペーハー）	pH（水素イオン指数）は、土壌の酸性度を示す数値。 0～14の数値で表される。0（酸性）～7（中性）～14（アルカリ性）。
	16	ホー	主に中耕（ちゅうこう）や土寄せ、除草に使う道具のこと。三角鎌鋼付や土寄せ・草削り鎌が該当します。
	17	萌芽（ほうが）	発芽のことです。
	18	放任栽培 （ほうにんさいばい）	整枝などの手をかけないで栽培することです。
	19	ほふく性（ほふくせい）	植物の茎や枝が地面をはうように伸びる性質のことです。ほふく性は1株でも横いっぱい広がります
ま行	1	間引き（まびき）	発芽後に、大きく育てる株以外のものを引き抜く作業のこと。 元気な株を残して、弱い株などを引き抜きます。
	2	マルチ	土の表面を覆って野菜などを栽培することを「マルチング」といい、その際に使うフィルムのこと。 ロールタイプ、シートタイプ、穴なしタイプ、穴有りタイプなどさまざまなものがある。 効果としては、保湿効果と防草効果がある。
	3	むかご	茎のわき芽が養分を蓄えて肥大した、小さな球根。珠芽（しゅが）とも言う。 株から落ちて発芽するので、繁殖に利用する。（ヤマイモなど）

野菜栽培に関する用語集

2025/2/15

用語50音	項番	用語	意味
	4	芽かき（めかき）	主枝を生長させるため、わき芽を取り除くこと。
	5	木酢液（もくさくす）	木酢液は、木炭を作る際に出る水蒸気を冷やして得る液体（粗木酢液）を、不純物を除去して蒸留したもの。土壌改良や虫除けなどに使われている。 過去には農薬として登録されていたが現在は失効しており、農薬の効果をうたっての販売は禁止されている。
	6	元肥（もとごえ	土づくりをする際にまく肥料のこと。

野菜栽培に関する用語集

2025/2/15

用語50音	項番	用語	意味
や行	1	誘引（ゆういん）	茎やつるを麻ひもなどで支柱やネットに固定し、雨風で株が倒れたり刃が重なり合うことを防ぐ作業のこと
	2	有機石灰 （ゆうきせっかい）	貝殻や貝殻化石を原料とする石灰肥料。 他の石灰とは違い、効果は緩やかで撒いた後にすぐに肥料を与えるたり植え付けをしたりすることができます。 カキやホタテの貝殻、貝の化石、卵の殻などがあります。
	3	有機肥料（ゆうきひょう）	植物性（油かす、草木灰、堆肥等）と、動物性（魚かす、骨粉、鶏ふん、牛ふん）に分けられる。 有機肥料はそのままでは吸水されず、土の中の微生物の働きで分解された後、根から吸収される。効き目は遅いがゆっくり効き続け、土質の向上にも効果がある。植物を植え付ける前に元肥として施す。
	4	有機物・無機物 （ゆうきぶつ・むきぶつ）	有機物とは、基本的に生物由来のもので炭素（C）を含む物質のこと。生物体内で作られる炭水化物や脂質、タンパク質など。（二酸化炭素など簡単な元素化合物は無機物に含まれる） 無機物とは、有機物以外の全ての物質。水や金属などのように炭素（C）以外の元素で構成されているもの。
	5	有胚乳種子／無胚乳種子 （ゆうはいにゅうしゅし／むはいにゅうしゅし）	植物の種子は、有胚乳種子と無胚乳種子の2種類に分けられる。 それぞれ養分（発芽に使うエネルギー）を貯蔵している場所が異なり、有胚乳種子は胚乳に、無胚乳種子は子葉に蓄える。 有胚乳種子 イネ トウモロコシ トマト ネギ ホウレンソウ 無胚乳種子 カボチャ キャベツ キュウリ ゴボウ スイカ ダイコン ダイズ レタス
	6	溶液栽培 （ようえきさいばい）	土を使用せずに、植物の成長に必要な栄養素を処方した培養液で栽培する方法。
	7	葉菜類（ようさいるい）	葉を食用とする野菜のこと。 ほうれん草、小松菜、ねぎ等
	8	溶脱（ようだつ）	土壌中の物質が、蒸発や降雨などを通じて地下水などに流出すること。
	9	予措（よそ）	種子や球根にあらかじめ病害虫の防除や発芽促進のための処理をすること。
ら行	1	レーキ	畝を立てた後に、土の表面をきれいにならす道具。抜いた雑草を集めることもできる。
	2	リサージェンス	害虫防除のために農薬を散布したにも関わらず、散布前よりもかえって害虫が多くなる現象。その要因の1つには、農薬散布により対象害虫の天敵が減少してしまうなどがある。
	3	リビングマルチ	野菜を栽培している畑で、同時に緑肥など別の植物を育てて地表を覆うこと。 雑草抑制、地力アップ、土壌流出防止などの効果がある。

野菜栽培に関する用語集

2025/2/15

用語50音	項番	用語	意味
	4	鱗茎（りんけい）	葉が養分を蓄えて多肉となって重なり、球形や卵形になったもの。タマネギなど。
	5	輪作（りんさく）	連作障害を防ぐために、同じ場所に異なる科の野菜を順番に作付けすること。 栽培間隔をあけるべき期間を「輪作年限」と言う。
	6	連作（れんさく）	同じ仲間の野菜を同じ場所で続けて栽培すること。 連作によって土壌に病害が発生し生産量が落ちていく事を連作障害といいます。 毎回、畑のレイアウトを決めてノートなどにまとめ、次回作付けの際に同作物の植え付け位置変更などをかけると連作障害を防げます。
わ行	1	わき芽（わきめ）	葉や茎の付け根から出る芽のこと。側芽とも言う。
	2	わき芽かき（わきめかき）	わき芽が大きくなる前につみとること。わき芽かきを行う事で収穫量などにも影響するため大事な作業です。 わき芽を全部摘み取り主軸の茎1本で育てる事を【1本仕立て】、わき芽を1本残してY字に育てる【2本仕立て】、わき芽と合わせて3本で育てる【3本仕立て】があります。
	3	早生（わせ）	作物や果物で、早くできる品種（⇔ 晩生） 同じ野菜でも、品種によって種まきから収穫までの期間（栽培日数）が違います。 早い時期から植えられて短期間で収穫できる「早生」、早植えには向かずゆっくり育つのが「晩生」。 その他にも、中間的な中生や、極早生、超晩生などがあり、うまく組み合わせることで時期をずらして安定的に収穫することが可能です。 早生は栽培期間が短いため、病害虫の被害に遭いにくく栽培管理も楽なので、初心者にもオススメです。 晩生は栽培期間が長い分、味のよいものができますが、病害虫に掛かるリスクが増え、管理や手間も掛かります。